

福田誠治著「未来の学力 - フィンランドと日本をつなぐもの - 」下野新聞 2009年9月7日朝刊を読む

子ども中心主義の教育

1. 訪ねる先々で、多くのフィンランドの校長たちが、学校の教育方針を「なすことで学ぶ」と表現する。それを聞いて、1950年生まれの筆者には、遠い昔の記憶がよみがえったものだ。
2. 終戦直後、米国が日本に「新教育」を持ち込んだ。経験主義と言われ、言葉を覚えるよりは自ら生活の中から学ぶという姿勢が強調されていた。
3. 「春の野山」とかいう单元では、学校の裏山に出かけて、植物観察をしたり、絵を描いたりした。社会を知る单元では、おまわりさんや農協の職員など、担当を決めてそれぞれの子どもが調べ、教室でその役割を演じた。
当時、日本中に有名になったのは、山形の中学校で展開された「山びこ学校」であり、あるいは全国各地で実践された「生活綴り方」であった。米国の教育哲学者デューイの言葉通り、まさに「なすことで学ぶ」授業が実現されていた。
4. そのころの日本の教科書には、「この本に書いてあることを、順々に説明したり、暗記させたりしては困る」(「社会科教科書・土地と人間」、47年)とか、「無理をしてもこの本に書いてあることだけは理解させなければ、社会科の学習が成り立たないと考えたりしては困る」(「社会科教科書・気候と生活」、48年)と書いてあったのである。
5. 日本では、58年の学習指導要領改定以降に、この新教育は姿を消す。高度経済成長は、全国一斉学力テストとともに日本の隅々に学力競争を普及させた。だがそのほぼ10年後、今度はフィンランドが子ども中心主義の教育に取り組み始めたのである。
6. そして、歴史の不思議な巡り合わせで、90年代、産業構造の転換と転職の時代、生涯学習で学び続ける時代、そして学力が国境を越える時代に、欧州連合(EU)と経済協力開発機構(OECD)がフィンランドの教育に注目することになる。

[コメント]

2006年3月のヘルシンキでのフィンランドの教育に関する国際会議にも参加した福田教授のフィンランド教育論。これからの日本の教育を考えるのに有益。

- 2009年9月7日 林明夫記 -